

リイのサマみイだれエがーみイエー。トコ眞骨、寒骨寒紅梅、押してけ押してけ三段目、トコドッコイ／＼／＼。…… 馳山ア。何と汝れの禪は長い禪やなア。……何イ。先きが損んだので切て放たア。……何おや知 三十六廻てまだ此様に餘てるがナ。面倒臭い、狹んどいて遣れ。サー何ふぢや」

人間が眞樫に 雲齋の獨樂見た様な物が出来よつた。

「サア、ドブツかつてごんせ」

「イヤ、申し合せて遣てんか」

「何を小癪ナ。ヨイシヨ」

「待つた」

「コラ。稽古に待つたが有るかい。確かり來ウ。ヨイシヨ」

「待つた」

「何遍待つたするのんぢやイ」

「八十六遍するのや。貴方の身體が可え加減草疲れた時分に、不意に後ろへ廻て足の折れ踏みを突くのや」

「豪い勘定付けてよるナ。そんな事で稽古になりやせん。ソレ。ドーンと來ウ。ヨイシヨウ」

「ア痛タ、、、。ア、堅い胸やなア」

「阿呆云え、こりや膝坊子ぢやイ」

「そら痛い苦やがナ。もつと柔い處無いか」

「エ、五月蠅い奴ぢや。ソラ、よいしよウ」

「ア、これは柔かい。腹やな」

「何が腹まで背が届くかい。掌ぢやい」

「ア、掌かいナ。……アリヤアよいしよ」

「ソラ來い、よいしよ／＼／＼」

「ウワー。モウ宜え／＼」

「エー確かり來んかい。ソラ來い／＼／＼」

充分揉み技かれてフラ／＼する奴の兩耳に掌を當て、力任せにゲルツと廻すと、撥みでジーン……。

「フワー。豪い／＼や／＼。目が舞ふ／＼。誰ぞ止めてんか——」

「兄弟子もう堪へて遣らんせ。可哀想に死んで仕舞ふがナ」

「ア、辛度い／＼。ワ／＼。大きに有難ふ、又明日頼みます」

「オ、又明日休まずに來んせ」

